

「お山の結婚式」

権禰宜 馬場 慶太郎

令和五年十月、武蔵御嶽神社にて結婚式を挙げさせていただきました。御嶽山では実に十五年ぶりとなる神職の結婚式で、式を御嶽神社で挙げたのち、披露宴は自宅の宿坊で行いました。今回は、今日では少なくなった自宅で行う結婚式について紹介したいと思います。

近年では、結婚式の様相も多様化し、教会で牧師さまをお迎えしスーツやドレスに身を包んだ新郎新婦が、招いたご親戚や友人の前で賑々しく挙式する一般的なもののから、神前ではなく人前であったり、そもそも新郎新婦だけで行うものなど様々です。また多くの場合、式場の手配や披露宴の準備、衣装の着付けなどは、ホテルなどの式場に併設する結婚式を専門に扱うコーディネーターなどにお頼みするのが一般的かと思えます。

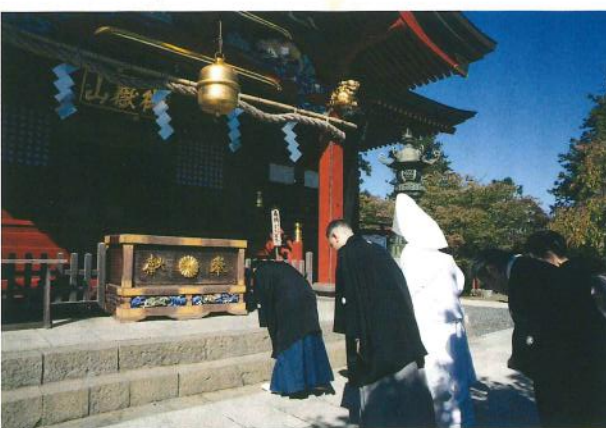


御嶽山には、江戸時代より続く隣組制度が今日まで残っており、冠婚葬祭の際は五件から六件で構成された隣組どうしが集まり、結婚式や葬儀などの段取りを何から何ま



で取り仕切って頂きます。今回の結婚式に際しても、式当日はもちろんのこと、結納披露から案内状の発送、披露宴の準備から進行、食事に至るまで、組合の皆様やお付き合いの方々

ました。一部和装の着付けなども、御嶽山内のお付き合いの方にお手伝い頂きました。媒酌人を、以前務めておりました板橋区は東新町、水川神社の宮司様にご依頼し、結婚奉告祭は武蔵御嶽神社前宮司の須崎様に斎主をお願い致しました。組合の皆様には式の前々日からお集まりを頂き、総出で披露宴会場である宿坊を清掃し、親戚や来賓の方々をお迎えする準備をします。今回の披露宴は総勢七十名ほどでしたが、宿坊と言っても一般的なホテルや式場とは違い、そこまで設備も大きくはありません。また、十五年ぶりということもあり、式の次第や会場準備など若干辿々しくもありましたが、何とか結婚式当日を迎える事が出来ました。お組合の皆様には大変なご苦勞を頂戴し、頭の下がる思いです。当日は組合の代表を先頭に、媒酌人から新郎新婦、親戚を含んで隊列をなし、自宅の宿坊から御嶽神社まで徒歩で進みます。神社での祭典を行ったのち、山上のお付き合いの



拜殿に到着した様子

方を含めたご来賓をお迎えし、披露宴をおこないました。許容人数の問題もあり、お互いの友人は招待できませんでしたが、久しぶりのお祝い事と言うこともあり大変賑々しく納める事が出来ました。御嶽山のなかでも、人手不足や世間の流れにともなう、式は神社で挙げ、披露宴は麓の会場を借りて行う、というような事も増えてきております。今回このように山内で行えた事は「家」として大変ありがたく、また後世に古いしきたりを残していくという観点からも、貴重な経験となりました。結婚式は、単に新郎新婦の「人と人」のものである以上に「家と家」のつながりを強固にするものだと実感致しました。数は少なくなるかも知れませんが、古来のしきたりや文化を守り伝えてゆくことも神職のつとめのひとつだと思います。

「見えぬけれども、いるんだよ」 — 御師が聞いた謎の遠吠え —

令和五年大口真神式年祭にあたりましては、皆さまのご協力・ご賛助を賜り、盛大に執り行えましたこと、あらためて御礼申し上げます。

巡り巡って当社へ辿り着いた頭骨にはじまる神奈川県清川村のオオカミ頭骨”再発見”、『オオカミの護符』上映と鼎談、野生動物画家・岡田宗徳氏による二ホンオオカミ復元画の展示、写真展に作品展。この波は当社の領域のみならず、つい先日、「ヤママイヌの一種とされる剥製は二ホンオオカミである可能性が高い」と中学生が学術論文を発表したニュースもあり、元来二ホンオオカミが持つ魅力と関心の高まりを感じる一年となりました。

当社の山頂、神社境内地でもとりわけ高い位置にある大口真神社。神話の時代、山域で難に遭われた日本武尊を助けたオオカミが大口真神さまとなり、この地を護る神として鎮まられています。二ホンオオカミへの関心が高まったこの機会に、一笑に付して忘れてしまうにはあまりに惜しい、当社の御師・下田利夫氏が山内で聞いたという「謎の遠吠え」のお話をここに記録します。

— その「遠吠え」についてお聞きします。山内とはお聞きしましたが、いつ頃のお話なのでしょうか？

— もつ二十年くらい前だと思っただけです。すぐそこだよ。

— 聞こえた、のがですか？

— そこだよ。向こうも気づいてないで鳴いたのかな、感じからして。五メートルくらいしか離れてない。ワオーっという。はじめは普通だったんだけどね。それから違うのよ、ワオー…グウウ

— グワァノってすごいんだよ。憎しみ恨みのこもったような。まともじゃないの。あんまり耳障りで、このやろうノって追いかけたんだよ。そしたらね、どこ行っちゃったんだか。見えないうし、音もしないし。

— 犬ではなかったのでしょうか？

— 飼われてた犬じゃないね、あんな声で…。声からすると大きさは柴犬くらいだと思うけど。

— オオカミの可能性はありますか？

— 野犬か、ヤママイヌか、オオカミか。オオカミは集団生活だっというけど、一匹だったからね。一匹狼とも言うけど、どうなんだろうね。

— ただ混血のね、オオカミの血を引くヤママイヌっていうのはいるのかもしれないね。純粹な二ホンオオカミはいないのかもしれない。そういう野犬を交配して二ホンオオカミに近づける実験をしたという話も聞いたけど。

— なるほど。ありがとうございます。調べてみます！

— でもね。俺はね、反省してるのよ。人生はね、反省して物事が成り立つのよ。頭に来てカッカして何の意味があるの。冷静さ、判断を失うのよ。反省して、いかに直せるかと。読者に訴えたいのはそういうこと。ね。

— 実はよ、その遠吠えは数日おきに聞こえてよ。同じように二回、三回と追いかけて。でも、四回目はなかった。そこでようやく気がついたの。しまった、録音しておけばよかった！って。いいお金になったかもしれないの。ねえ？



— オオカミもカワウソも見えないから絶滅したってことになってる。けど、山にはまだ見たことのない生き物がいるんだよ。これは間違いない。見てないからいないってのは言い切れないと思うよ、俺は。
— 下田御師のロマンあふれる話は脱線しながらも続くのであった。
(権禰宜 服部朋也)